

うたとかたりの対人援助学

第26回「高齢ろう者の人形劇『浦島太郎』を観る」

鵜野 祐介

1. 人形劇「浦島太郎」を観る

今年（2023年）7月20日、愛知県春日井市の文化フォーラム春日井で、「高齢ろう者×アートプロジェクト2023 成果発表会 人形劇『浦島太郎』【聴覚・ろう重複センター桃版】」を観ました。



今回の公演の企画制作に携わっておられた池内剛志さんが、ろう文化における民話の語りの活動について私が研究していることを耳にされて、お誘いくださったのです。

会場は、本格的な照明設備を具えた、舞台を階段状の座席から見下ろす形の立派なホールでした。ろう・聴覚障がい児学校の子もたちとその保護者や、出演者の聴覚・ろう重複センター桃の家族や関係者と思われる方がたを中心に、百名ぐらいの方で客席はほぼ埋め尽くされていました。

出演は、当日配布のパンフレットによると、前述の聴覚・ろう重複センター桃の24名と、デフ・パペットシアター・ひとみの団員4名で、第二部のトークではそれに加えて手話通訳者が付いていました。前口上の後、第一部は、全三幕からなる約1時間の上演で、第二部は、池内さんの司会による、出演者や桃のスタッフ、構成・演出者同士のトークや、観客との質疑応答で構成された30分あまりの交流会でした。

殆ど手話が分からない私のような者にとっても、昔話「浦島太郎」のあらすじは知っており、配布されたパンフレットを予め読んでおいたので、十分に楽しめる内容でしたが、ろう者のセリフは手話であり、その全てを通訳者が音声日本語でナレーションするわけではないので、手話が分かったらもっと楽しめただろうと思いました。

「人形劇」と銘打ってはいますが、出演者自身の身体表現を主としつつ、人形による表現を各所に取り入れた演劇でした。このお芝居の最大の特徴は、助けた亀に連れられて浦島太郎が訪れた竜宮城で、出演者の高齢ろう者たち自身のさまざまな「竜宮体験」を目撃するという構成でした。そして、最後に玉手箱を開けた浦島太郎が白髪のお爺さんになった後、この事態を彼がどのように受け止めるのかが、この演目を高齢ろう者の方たちが演じることの意味と大きく関わってくるのですが、その種明かしは後ほどにします。

2. デフ・パペットシアター・ひとみ

当日配布のパンフレットによれば、デフ・パペットシアター・ひとみは、公益財団法人「現代人形劇センター」が運営しています。

現代人形劇センターは1969年、人形劇団ひとみ座を母体に、文部省認可の財団法人として発足しました。日本には人形浄瑠璃文楽をはじめ、多くの伝

統人形芝居が継承され、いっぽう現代人形劇も豊かに演じられています。設立の趣旨は、その両者の架け橋となることでした。以来今日まで50年にわたり、次のことを目的として活動を続けてきました。

- ・人形劇の創造に、新たな可能性を提起すること。
- ・社会に対して人形劇の芸術としての多様な魅力を伝えること。
- ・地域社会の中で、人形劇が果たせる役割を追求すること。

一方の、デフ・パペットシアター・ひとみは、ろう者と聴者がともに創造する、世界でも数少ない専門人形劇団です。ろう者の感性を生かし、視覚性豊かな新しい表現をめざしています。1980年の設立以来40年にわたり全国700箇所(1800ステージ)で公演。海外でも11カ国、28都市で公演しています。観客は障がいの有無や年齢を越えて広がっています(同上のパンフによる)。

3. 聴覚・ろう重複センター桃とプロジェクトのあゆみ

当日配布の別のチラシによれば、春日井市にある聴覚・ろう重複センター桃(NPO法人つくし)は就労継続支援B型事業所です。「tatami des momo」というブランド名でたたみのへりなどを使った自主製品を販売したり、下請け作業をしたりしながら、高齢ろう者の集う場所になっています。

高齢ろう者×アートプロジェクトは2021年に始まったもので、芸術家チーム(デフ・パペットシアター・ひとみ/花崎攝)と一般の高齢のろう者が一緒にアートに取り組む企画です。2021年度は、神奈川県、岡山県、愛知県の高齢のろう者へのヒアリングとワークショップを実施。高齢ろう者の子どもの頃の思い出を元に、芸術家チームがパフォーマンスを創作・発表しました。

2022年度、「桃」のみなさんと、絵や人形のワークショップを実施し、これを通じて仕事や家庭、学校などについてのエピソードを深め、小さな人形劇にして共同で発表しました。そして2023年7月、「桃」のみなさんと芸術家チームで人形劇「浦島太郎」(以下、桃版「浦島太郎」)を発表しました。

4. 「竜宮ガイドマップ」の作成

先ほど述べたように、今回の桃版「浦島太郎」の最大の特徴は、助けた亀に連れられて浦島太郎が訪れた竜宮城で、出演者の高齢ろう者たち自身のさまざまな「竜宮体験」を目撃するという構成です。

台本の元になったのが、「桃」のみなさんがひとりひとりの思い出のエピソードやこだわりを盛り込んで作った「竜宮ガイドマップ」です。絵と文でできしており、次の4つのコーナーに分かれています。

「乙女の天国」……「母の手料理がなつかしい。煮物がおいしかった。家族3人で囲んだ食卓」(K.K.さん)。「北海道で暮らしていた15歳の時、母がいろいろな料理を教えてくれた」(H.M.さん)。「テレビを観ながら家族4人で囲んだ食卓。父はお酒とプロレスが好き。よくケンカする両親だった」(K.K.さん)。「20歳ぐらいのときに姉と一緒に食べたスガキヤのラーメン。デザートにソフトクリームも欠かせない」(M.O.さん)。「健康の秘訣は毎朝の養命酒。もう20年くらいは飲みつづけている」(Y.S.さん)etc.。

「遊樂園もも」……「18歳のときに理容の先輩に教えてもらった魚釣り。あじ、ぶり、ひらめ、くろだい…いろいろ釣った」(K.E.さん)。「ボウリングの腕に自信あり! 会社のボウリング大会では優勝して賞品を持ち帰った」(S.S.さん)。「子どもの頃は一人遊びが好きだった。じょうぶな砂団子を作るには秘訣がある」(K.M.さん)。「趣味のウォーキングは健康のため。昔は食べ物の好き嫌いが多くて体が弱かったから」(M.S.さん)。「昔のパチンコは玉の動きをゆっくり追って楽しめた。今のパチンコはスピードが速い!」(T.A.さん)。

「ズ〜」……「まだ結婚する前、縁の下にいた猫に自分のごはんの残りをあげていた」(T.M.さん)。「小学生の時、猫を飼っていた。自分は聞こえないから、猫が顔にふれて起こしてくれた」(S.M.さん)。「猫にさわるとかゆくなる」(K.I.さん)。「テレビで見たカメ。かわいい!」(K.F.さん)。「カメはかわいい! 乗ってみるのが夢」(H.O.さん)。「55歳くらいの時に飼っていた小型犬。かわいかった。毎日一緒に散歩した」(Y.H.さん)。「息子家族が夏休みにリスザルを連れてきた。すばしくて、逃げ出さないかヒヤヒヤした」(S.K.さん)。

「シャチホコ竜宮パーク」……「親戚と行ったフラワーフェスティバルの思い出。私はポインセチアが好き!」(J.R.さん)。「娘と砺波チューリップ公園に行った思い出。雪の残る山が遠くに見えてきれいだった」(S.O.さん)。「ろう学校で学んだ洋裁を活かして色んな服をつくった。友達にスーツやスカートをつくってあげたことも」(S.A.さん)。「家族で見た名古屋城の花火が忘れられない。実はシャチホコにはオスとメスがある」(Y.O.さん)。「昔はスナックのフロアで飲んで踊って。ルンバ、ワルツ、サンバ…。色んな男性に誘われた」(J.K.さん)。

ここに紹介された、自分史としての22のエピソード

ードは、高齢者一人ひとりにとってかけがえない「竜宮体験」であり、それを舞台上で演じることで追体験することの喜びを感じることができたのではないのでしょうか。また、周りの出演者や観客たちにとっても、当事者が体全体で表現する喜びや楽しさを目の当たりにして、その感動を共有することができるでしょう。演劇には、絵や文章だけでは伝えきれないものを伝えることができるのです。それは、手話言語という身体的言語の表現を長年にわたって用いてきた高齢者の方がたにとって相応しいツールであるということも指摘できるでしょう。

5. 何が「めでたしめでたし」だろうか？

最後に、元の昔話「浦島太郎」のストーリーと同様に、玉手箱を開けた浦島太郎は白髪のお爺さんになります。「桃太郎」や「花咲爺」をはじめ、有名な日本昔話の多くが結婚したり、ほうびや宝物をもらったりして、「めでたしめでたし」で締めくくりますが、「浦島太郎」の結末ではそうはなりません。元いた家も親もなくなって、絶望してタブーを侵して玉手箱のフタを開けた結果、老いさらばえてしまうという、「めでたしめでたし」とは言えない結末です。

通常の昔話らしからぬ結末を、今回の桃版ではどのように収束させようとしたのか。この点を、台本を確認しながら検討してみましよう。

上演終了後、企画・制作者の池内さんから送っていただいた台本第二稿の最後の場面（第三幕）は次の通りです。

第三幕 地上に帰った浦島

捲りをめくる。「浦島のふるさと村」 上手奥から登場した浦島は、不思議そうに辺りを見まわす。確かに住んでいた場所のはずだが、まるで変わっている。家があったはずのところにやってくる。

浦島「ない！ 俺の家がない！ どうなってるんだ？」
浦島は頭を抱えて、途方にくれる。

玉手箱を思い出し、……、3つ目には、「開けるな！」の張り紙が貼ってある。浦島は、開けるか開けないか迷うが、開けてしまう。中から煙が出てきて、浦島は一気にヒゲの真っ白な老人になってしまう。浦島は白いヒゲやまがったコシに気がついて、驚き、途方に暮れて、座り込む。

桃のメンバー(A さん)が出てきて、浦島に語りかける。

A「歳をとってから始めたグラウンドゴルフは楽しいよ」

K「バーベキューは美味しいよ！」

E「釣りは楽しいよ。一緒に行こう。」

など、口々に浦島に声をかける。

浦島「釣りに行こうか、歳をとっても楽しくやっつけようだ！」

口上（手話と音声通訳で）浦島太郎が、竜宮から生まれ故郷の村に帰ってみると、村のようすがすっかり変わり、家もなくなっていました。竜宮で楽しく過ごしている内に、地上では時間がものすごく経っていたのです。浦島太郎が、乙姫様からもらった、開けてはいけないと言われていた3つ目の玉手箱を開けると、急にすっかり年老いてしまいましたね。浦島はすっかり落ち込んで、悲しんでいました。でも、楽しそうなお高齢の方たちの話を聞いて、また元気が出てきたようでした。

皆さんは歳を重ねることは、悲しいことだと思いますか？ それとも、歳を重ねても、その歳ならではの楽しみを見つけていけるのでしょうか？ どう思いますか？（幕）

この台本と実際の公演内容との違いについて、池内さんから次のようなコメントをいただきました。

実は、公演当日の朝に話し合っただけで変更した部分なのです。浦島が「年をとっても楽しみがある！」と勇気づけられるという大意は変わらないのですが、いろいろな楽しみを列挙するのを取りやめて、素敵な場所である「桃」に誘われるという流れにしました。

「心配いらないよ、桃という場所に行けば手話で話せる仲間がたくさんいるよ」「仕事もたくさんあって、毎日楽しいよ。おいだよ」「そうか、それなら僕は年をとってしまったけれど大丈夫だ」という感じです。

桃は本当に楽しい空気に満ちた事業所で、利用者さんも桃に来られることを毎日とても楽しみにしています。実際に「今いちばん楽しいことは何ですか？」と利用者さんに質問すると、「桃に来ること」という答えがたくさん返ってきました。

ですから、キチンと定義してはいないので曖昧ですが、演者自身の過去の思い出が留まる竜宮という空間と、今の幸せを象徴する「現世の竜宮」みたいな空間＝桃という対比がうっすらと、結果的には生まれたかなと思います。

6. 3つの要素

昔話の語りが行われる時、その物語に込められたメッセージに対して、「語り手は誰か」「聞き手は誰か」「どのような語りの場か」という3つの要素が大きな影響を与えられます。

今回の上演において、「語り手」とはすなわち出演者の高齢者たちとデフ・パペットシアター・ひとみの役者たちです。次に、「聞き手」とはすなわち

自分のセリフを聞いて（＝手話を読み取って）くれる同じ舞台上のろう者たちや役者たち、そして客席の観客です。そして、「語りの場」とは会場です。

とりわけ重要な位置を占めるのが、語り手であり聞き手でもある高齢ろう者たちであり、また、彼ら／彼女たちと親密な関係を持ってきた施設のスタッフや家族でしょう。そうした人びとへのメッセージであればこそ、「皆さんは歳を重ねることは、悲しいことだと思いますか？ それとも、歳を重ねても、その歳ならではの楽しみを見つけていけるでしょうか？」という口上で締め括られたに違いありません。

老いや死を絶望することが、元の昔話「浦島太郎」の主題であるはずなのに、これを捻じ曲げてしまったのは良くないと批判することも可能かもしれません。けれども私は、上の3つの要素によってメッセージは変わっていくものであり、むしろ変えていくべきものであって、それこそが「本物の」昔話の語りだと考えています。

ですから、このような「めでたしめでたし」もアリだったのではないかと考えています。

7. 出演者への取材

後日、聴覚・ろう重複センター桃のスタッフ・伊藤久枝さんにメールを送り、出演された皆さんに質問をしていただき、回答を得ました。

① 今回の公演の中で一番楽しかったことは何ですか？

▷カメをいじめるシーン(75歳・女性)。

▷箱から煙が出て、おじいさんに変身するシーン(70歳・男性)。

② 「浦島太郎」の話は子どもの頃から知っていましたか？ 知っていたという方は、本を読んで知りましたか？ テレビ番組などをみて知りましたか？ それとも誰かから、手話で教えてもらいましたか？

▷ろう学校小学部の時にろう学校の先生が紙芝居で「浦島太郎」を話してくれた。音声日本語で話したただけだったので、内容はよくわからなかった。家に帰り両親に「浦島太郎」の絵本を買ってもらい、自分で絵と文章を繰り返し読んで覚えた。小学部1年～3年までは発音訓練ばかりやっていたので、本を読むようになったのは小学部4年生からだった。ほかに紙芝居で見たのは「ももたろう」と「花咲じいさん」だったが、貧乏な家庭だったのでその本は買ってもらえなかった。(75歳・女性)

▷8～9歳のころに「浦島太郎」の絵本を父が買ってくれ

て自分で読んだ。学校も家庭も手話は禁止されていたから自分で本を読み、わからない言葉はろう学校の先生に質問していた。わからない言葉だらけだったが、絵を見れば内容はだいたい分かった。ほかに「ももたろう」「きんたろう」を読んだ。(92歳・女性)

▷ろう学校小学部2年生の時の学芸会で、3年生が「浦島太郎」を演じていた。しかし、手話ではなく音声日本語のみでの演劇だったので内容はわからなかった。絵本で読んだこともなかった。(75歳・男性)

▷ろう学校小学部4年生のころ、学校に置いてあった絵本で「浦島太郎」を読んだ。ろう学校の先生や両親から話の内容を教えてもらったことはなく、自分で絵だけを見て想像していた。昨年、地元の手話サークルで「浦島太郎」の手話語りをしてほしいと日本語の文章を渡された。手話学習者にわかるように手話表現するために繰り返し練習をして、初めて「浦島太郎」の内容を知った。ほかに「ももたろう」を本で読んだり、テレビで「鶴の恩返し」をみたことがあった。(70歳・男性)

▷「浦島太郎」の話は、手話ではなく音声日本語で聞かされただけなので、内容を知ることはできなかった。ろう学校は手話が禁止されていたから。(74歳・女性)

▷ろう学校小学部2年生ぐらいのときに「浦島太郎」の本を見たことがあるが、文章が読めず内容は分からなかった。ただ、絵だけを見ていた。小学部5・6年生になったときに文章が少しわかるようになったが、物語の内容は誰も教えてくれなかった。ろう学校の中に手話はなかった。漫画本を友人から借りて読んでいたが、漫画は絵が多いから内容がよくわかった。今回人形劇をやって、「浦島太郎」の内容を初めて知ることができた。(82歳・女性)

▷ろう学校小学部3・4年生のころ「浦島太郎」の劇をやった。手話ではなく、音声日本語で。うまくセリフは言えないし、内容もさっぱりわからないまま13歳ごろにまた、ろう学校の先生が「浦島太郎」を音声日本語で話してくれた。そのときには内容は50%ぐらい理解した。60歳になって手話サークルで、サークルメンバーの聴者が手話で「浦島太郎」の話をしてくれた。そのとき初めて物語の内容が100%理解できた。ろう学校時代、他の学年が劇をやっていたことは覚えているが、音声日本語による劇だったので何も記憶に残っていない。今回、人形劇を見に来てくれた人から「面白かったよ」と言われるが、面白い劇をやったわけではないのに「面白い」と言われ、とても不思議に思った。(87歳・男性)

ろう学校時代、本を読んだ経験は一切ない。本は発音訓練のために使うものであって、読んで内容を理解するものではなかった。正しい発音かどうか分からず、とにかく声を出していた。ろう学校では手話は禁止されていたので、先生や親から「浦島太郎」の話の聞いたことはない。「浦島太郎」という名前も聞いたことはない。今回、桃で人形劇をやって初めて「浦島太郎」という名前を知った。

ろう学校で本を読んだ経験はない、手話は禁止されていた、内容も分からないまま音声日本語で劇をさせられたなど、痛切な体験に胸が痛みます。

8. 架け橋としての「手話による民話の語り」

これまで、民俗学や口承文芸学では、「語り」と言えば、音声言語のことであり、口から耳へと届けられる「声の文化」のことしか考えてこなかったように思われます。

けれども、2016年7月に英国スコットランドで出会った若い民俗学者から、手話という身体表現の言語を用いた、昔話や伝説や世間話、それから自分自身の体験を語る「生活譚」を含めた総体としての「民話」の語りの文化が、ろう者の社会の中で受け継がれてきたということを知らされてショックを受けて以来、日本ではどうだろうかと調べてきました。

取材を重ねていく中で、さまざまな形で「手話による民話の語り」を実践する人びとが全国各地にいたことが分かってきました。これまで本誌での「うたとかたりの対人援助学」の連載の中でも取り上げてきた、私自身が出会ってきた方がたのお名前を具体的に挙げておきます。民話の絵本を手話で読み聞かせする奈良県立ろう学校教師の吉本努さん（第8回）、民話の絵本を手話で読み聞かせするとともに、民話のストーリーの歌を「手話うたパフォーマンス」で演じる大阪府吹田市の藤岡扶美さん（第10回）、そして、仙台市を拠点として素話（すばなし）で民話の語りをしておられる半澤啓子さん（第22回）。

この研究を通じて、「語りの文化」というものは決して、口から耳への、音声によって届けられる聴覚情報によるだけではなく、手話という身体表現によって届けられる視覚情報によるものもあること、そしてそれは時代を超え、民族や社会を越えて傳承されてきたことを知りました。

今後、そのような手話による民話の語り文化の価値を、ろう者の方だけでなく、聴者（聞こえる人）の方にも気づいていただき、一緒に物語の世界を楽しむ機会を持つこと、それによって、マジョリティ（社会的多数者）である聴者が、「ろう者の世界（deaf world）」というマイノリティ（少数者）の文化を知

るきっかけとなり、両方の世界の架け橋となることが期待されます。今回の桃版「浦島太郎」の公演もまたその一環となるものと言えるでしょう。

9. おすすめの昔話「うぐいすの浄土」

桃版「浦島太郎」では、「ろう者の世界」という「異郷（異界）」を訪問するという設定となっています。昔話や伝説には「異郷訪問譚」と呼ばれる話型群があり、「浦島太郎」の他にも、「天人女房」「鼠浄土（おむすびころりん）」「こぶ取り爺」などがあります。

その中でも、異郷としての「ろう者の世界」を表現するのに相応しいと思われる昔話として「鶯（うぐいす）の浄土」があります。あらすじは次の通り。

- ①若者が野中で道に迷い、立派な屋敷に泊めてもらい娘の婿になる。
- ②娘は若者に、四つ目の倉だけは見るなと注意して外出するが、若者がつぎつぎに倉をあけて四季の農村風景に見とれていると、鶯が飛び出る。
- ③娘が、姿を見られたので行（ぎょう）が後もどりし人間にはなれない、と告げて鶯になって飛び去ると、屋敷は消え若者はもとの野中にある。
（稲田浩二『日本昔話通観 28』同朋舎出版 pp.268-269）

見てはならないとされる部屋（場所）の数は、四季にちなんだ4の他に、1年12か月にちなんだ12として、楽しいお祭りや年中行事が順に描かれるという類話もあります。そこでは、出演者の住む地域の年中行事を紹介するとともに、ろう者の方がたがこの行事にどのような形で参加していたのかを紹介するという構成を取ることができるでしょう。

元のあらすじを枠組みとして押さえた上で、語り手や聞き手のニーズに応じてアレンジしていくというこの手法は、他のお話にも適用できると思われ、今後いろいろな可能性に向けてチャレンジしていただければと楽しみにしています。

最後に、小文の執筆にあたり、ご協力いただいた池内剛志さん、伊藤久枝さんに御礼申し上げます。

